32

獅子文六

現代日本文学館

32

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 32
吉川英治・獅子文六

昭和四十二年八月一日第一刷

著者　吉川英治
　　獅子文六

発行者　上林吾郎

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一
振替東京七八七四三

印刷　凸版印刷
製本　凸版製本
定価　四八〇円

Printed in Japan　本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

吉川英治伝　杉森久英　3
松のや露八　21
函館病院　180
玉堂琴士　201
解説　217
獅子文六伝　奥野信太郎　221
てんやわんや　239
達磨町七番地　399

ロボッチイヌ 440
解説 451
注解 457
年譜 481
挿絵 関野準一郎「松のや露八」「函館病院」「玉堂琴士」
宮田重雄「てんやわんや」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

吉川英治伝

杉森久英

I

吉川英治は横浜の人である。明治二十五年八月十一日に生まれ、昭和三十七年九月七日、七十歳（満年齢）でなくなった。

吉川家は代々小田原藩士であった。英治の父直広は早く横浜へ出て、外人を目あてとした牧場を経営したが、失敗し、根岸の競馬場の近くで、寺子屋、幼稚園まがいの小さな寺子屋をひらいた。家の前からは競馬場の芝生が見えたということである。英治はその家に生まれ、四歳ころまでそこに住んだ。本名は英次である。

父は一徹で、頑固で、明治時代の人間に共通の覇気と、立志の夢に燃えた男であった。

英治の母いくは千葉県佐倉藩士山上弁三郎の娘であった。山上家は吉川家にくらべて相当家格が高かったらしく、夫婦喧嘩などがはじまると、英治の母は泣きながら、わたしは仲人口にだまされて来たのだといったという。

吉川家はたびたび引っ越した。引っ越すたびに家は大きくなり、父の職業はかわった。母の身なりも美しくなり、婆やも女中も何人かにふえた。

やがて父は横浜の実業界で有力な一人物といわれた高瀬理三郎に知られ、横浜桟橋合資会社というのを設立した。

英治は七歳のとき私立山内尋常高等小学校にはいった。家の近所に「いろは長屋」という貧民窟があって、人々は原始的な生活をいとなんでいた。そこに出入りすることは禁じられていたが、いろいろと珍しいものや面白いものが多いので、少年はひそかにあそび歩いた。

横浜はまた外国人の町である。近所には外人の家が多く、ふだんの遊び仲間にもジョージだの、フランクだのと呼ぶ外人の子が多かった。日本人の子供との間に、国境感はなく、めったにいがみ合わなかった。しかし、何かで喧嘩になると、自然、国別にわかれた。

らしゃめん（洋妾）も珍しくなかった。しかし、人々は彼らを差別や軽蔑の目で見ることはなく、むしろ未知の世界に対する好奇とあこがれの気分で見ていた。

のちに文学者になった人は、たいてい早熟で、幼少のころから多読の習慣があるが、吉川英治も五歳のときから巌谷小波の「世界お伽噺」を読みはじめている。近所に子供向きのものばかりの貸本屋があって、一冊一銭で貸したが、英治少年はその常連で、のちには一銭持っていって一冊借り、歩きながら読んで、読み終えるとすぐ引き返して、

「おばさん、これもういつか読んだ本だからほかのと取り換えてくんない」

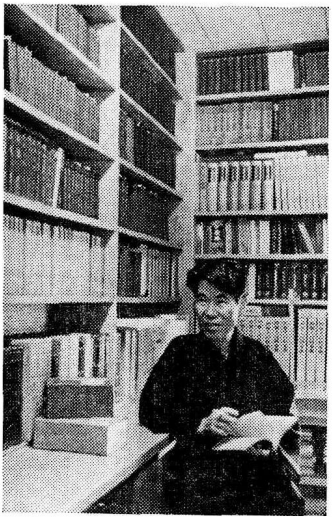
と、べつの本を借りることにした。そんなことが何度か続くうちに、おばさんから、

「これからは、あんたにだけは一銭で二冊ずつ貸してあげるから、あたしを二度立たせないでおくれね」

といわれた。

七歳の二年生のころから、彼は学課が終わっても、毎日二時間ずつ学校に残って、英語の単独教授を受け、また週に二回、帰宅後、近所の漢学塾で「中学漢林」「詩経」「十八史略」などを教わった。これらをあげると「論語」や「小学」の素読を習った。

知恵が目ざめるにつれて、学課以外の読書欲はさかんになった。小学校の近くに、学校の小使が内職にやっている貸本屋があって、顔見知りだったから、彼は帰りに立ち寄って、一日一冊ずつ読んだ。いわゆる大阪本という粗末な講談本で、「自転車お玉」「岩見武勇伝」「稲妻小僧」「田宮坊太郎」「鬼神のお松」、その他何でも、手当りしだいに読んだ。これらは普通、低俗な本ということになっているが、実は日本人の文学的常識の根幹をなすもので、たいていの文学者はこういう本を濫読することによって、教養の基礎を築いているのである。



赤坂の自宅の書庫で書見する（昭和33年）

半年もたつと、貸本屋の書棚には少年の読む本はなくなってしまった。彼はまもなく縁日の古本屋をあさることを覚え、黒岩涙香の翻訳物や押川春浪の冒険物を読破した。

それが昂じると、帝国文庫である。これは一段と高級で、むずかしい。しかし、各冊五、六百ページもあるのに、活字がぎっしりつまっていて、読みでがあるのが魅力であった。それに、近松のものや西鶴のものは、きわどい描写や露骨な叙述のところも、のちの版のように伏せ字でなく、元版のままのせてある。十二、三歳の英治少年は「春色梅暦」の米八の白い脛や仇吉の艶な姿に恍惚となっていたのである。

一方、彼は学友たちといっしょに、謄写版刷りの同人雑誌を出したり、いろいろの新聞や雑誌に投稿したりしはじめた。彼の中に、文学への志向がしだいに目ざめて来たのである。

彼はまた、家人の目を盗んで、伊勢佐木町の芝居小屋へかよった。そのころ壮士芝居（いまの新派の前身）も盛んであったが、彼はどちらかというと歌舞伎を好んだ。観劇もまた彼の中に作家への芽を育てたことは、いうまでもない。そのころの横浜芝居は、すべて通し狂言で、序から大尾まで、省略なしに演ずるので、演劇の骨格とか、浄瑠璃や小説の構成を知る上で、大いに参考になったのである。

十一、二歳までの吉川英治は、めぐまれた生活を送った

ということができよう。しかし、小学校を終えるころから、彼の家は悲境のどん底に落ちることになった。

II

彼が最初に変だと思ったのは、ある夜ふけ、見知らぬ男が何人も来て、二階の道具類をおろし、裏口から担ぎだしてゆく風景であった。こういうことが何回かあった。しかし、彼にはそれが何を意味しているか、わからなかった。

そのうち、英治の父直広と、横浜桟橋会社社長名義人の高瀬理三郎との間に、感情的な訴訟沙汰が起こった。根本の原因は、ちょうど日露戦争が起こって、横浜へ入る外国船がすくなくなり、会社の経営が不振になったことであるが、そこへ派閥争いや、感情問題がからみ、ある日突然、直広が拳固で高瀬をなぐりつけたことから、決定的な不和となったものであった。

訴訟は永びき、吉川家の収入は杜絶した。夜中に大勢の男たちが道具を運び出したのは、一部屋ごとにまとめて、道具屋へ売ったものであった。

これまでの裕福な暮しは、みるみる縮少された。踊りの師匠はことわり、女中は皆家に帰し、台所は英治の母ひとりでやることになった。やがて、質屋がよいがはじまった。

英治は小学校を卒業したら、当然、中学へゆくつもりでいた。ところが、卒業をひかえた十一歳の十月のある日、父は泥酔して帰ると、学校を退いて働きにゆけといった。

（上）大正二年、「三越の文芸」に応募、川柳一等当選の記念写真（二十二歳）
（左）母いくの肖像

彼は訴訟に負けて、これまでのような大きな家に住むことができなくなったのであった。

それから三、四日後に、彼はあるハンコ屋へ奉公に出された。子供のときから着馴れた紺絣をぬいで、丁稚の着る縞の着物に角帯をしめたときほど、悲しかったことはないと、彼は後年記している。

主人は風流のたしなみがあり、筆蹟もよければ俳句もつくるという、瀟洒な市井の君子人の風格のある人であった。ある日、友人の俳人が来て、二人ひそひそ話し合っていたが、突然英治にむかって「雨」という題で即座に作文をつくれといった。彼が作って差し出すと、そのまま家へ帰れといわれた。

あとで聞いたところによると、その前々日、彼は主人の

妻が髪結いに髪をすかせているところを、漫画風にスケッチしたのであった。それを見た妻が、

「こんなおそろしい子って、ありゃしない。さっそく追ん出して下さい」

といったものであった。作文を作れといわれて、辞退もせず、さっと書いたのも、小僧らしからぬ生意気な所業ということになるのであった。

川柳仲間の集い　左から三人目吉川氏　(大正4年)

ハンコ屋に住み込んでいるうちに、彼の父は大審院の敗訴のため、根岸監獄の未決監に入れられ、家族は戸部の場末のわずか三間の家へ引っ越していた。母は育ち盛りの子供を六人もかかえて、生活に喘いでいた。彼女は若いときから身だしなみがよく、起きぬけに手早く化粧して、素顔を人に見せぬ人であったが、このころはその習慣もなくなった。それでも、もともと色が白かったので、近所ではきわだって美しく見えた。

家計の苦しさを目前に見て、英治はぼんやりしてはいられないと思った。彼はある日、新聞の職業欄で見た求人広告で、横浜南仲通りの南仲舎印刷所を訪ねて、少年工にやとわれることになった。日給は十四銭、残業は一時間ごとに二銭である。米一升の値に近い給料であったが、彼としては、生まれてはじめて得た金であった。ハンコ屋では徒弟の期間中、一銭の小遣いももらえなかったのである。

ある日、父が監獄を出て、家へ帰った。彼は身体が弱ったせいか、いやに物やさしい男になっていた。その代り、以前のような豪放な口もきかなくなった。

窮乏に追いつめられた母は、十二歳の長女と九歳の次女を奉公に出した。あとは乳呑み子と幼女と、小学校へ入ったばかりの男の子だったから、これ以上口の減らしようがなかった。

父は一時禁酒を誓ったが、まもなく、また飲みはじめ、そうなると酒乱の癖が出て、家族の者を苦しめた。

「おれだってな、このままでは終わりはせんぞ。意地でもう一旗上げてみせるつもりだ」

というのが口癖だった。

英治が南仲舎へかよう行き帰りに、「小間物行商人ヲ募

ル。商品貸与。毎日純利一円以上、働キ次第」という看板が目についた。彼は母の懇意にしている婦人から十円借りて、保証金とし、行商をはじめた。商品は石鹸、髪油、チック、安香水、白粉、口紅、その他のこまごました物である。しかし、彼はなかなか知らぬ家へ入ってゆくことができず、ことわられても押してゆく勇気がなかった。父の知人の家を訪ねて、侮辱されることもあった。彼はまもなく行商をやめた。

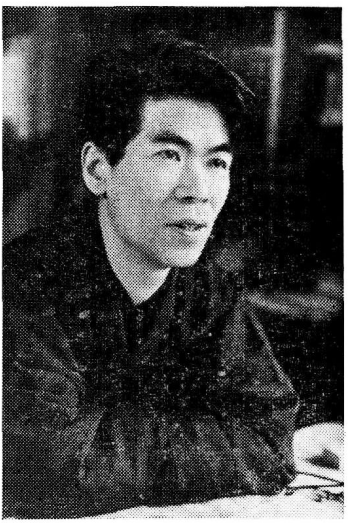
つぎに彼は横浜港の第二波止場の埋め立て地へ、臨時雇いに通ったが、二三ヵ月後に、税務監督局の給仕に採用された。このころ、父直広に再起の機会が訪れた。ある人の好意で新聞広告取次店が譲られたのである。英治は夜間中学に通うかたわら自分の家の帳場格子にすわって、父の仕事を手つだうことになった。

しかし、父はほとんど家に落ち着いていることがなく、毎日外を飛び歩いた。彼はこの商売ひとつを守るより、もっと壮大な夢に心を奪われていて、もう一度、むかしのような事業家として雄飛しようと、相場に手を出したり、別の方面へ金をつぎこんだりした。かつて大金を動かした経験のある彼は、小さな金であくせくする気がしなくなっていた。そのため、店は店員まかせとなり、英治も帳場にすわってはいるものの、たいしてすることがないので、日本画や水彩画をかいて、たのしんでいた。彼は将来画家になりたいと思っていた。それには東京へ出て、美術学校へでも入る必要があるが、父の顔を見ると、それも言い出せなかった。

父が外へばかり出ているので、店はまた苦しくなった。留守の英治や店員たちの仕事は、毎日押しかけてくる債鬼に、判で押したような決まり文句のことわりをいうことであった。

しかし、帳場格子の中の一年余りは、英治の生涯において、貴重な期間であった。家業の不振とは無関係に、彼は画をかいたり、俳句を作ったり、小説を書いたりしていた。家はもう一度没落の悲運を迎えるわけだが、それまでの猶予期間に、彼は、将来の活躍にそなえて、実力をたくわえることができたのである。

英治はまた勤めに出なければならなくなった。日の出町一丁目の続木商店という食料、洋酒、雑貨をあきなう店の

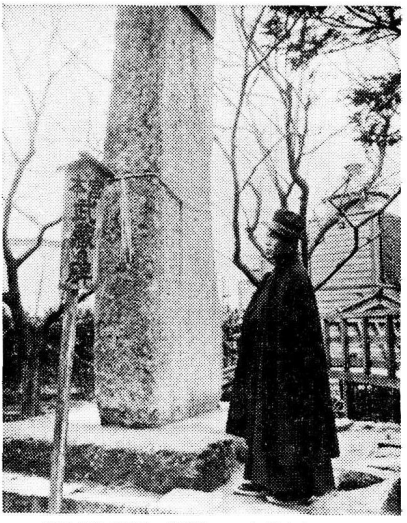


昭和8年ころ　中堅作家としてすでに着実な地歩をきずいていた

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

丁稚にやとわれることになった。明治四十年、十五歳の年の暮である。この年、三男の晋が生まれた。

続木商店は横浜に本店があったが、営業活動は横須賀の方が活潑であった。英治はやとわれてから一月半ばかりすると、横須賀の方へ回された。ここは主として海軍へ品をおさめていたので、店へは海軍の下士官や主計がたずねて来ることが多く、また番頭のおともをして碇泊中の軍艦をまわり、酒保で御馳走になることもあって、比較的たのしい日々が続いた。英治の顔にもようやく少年らしい快活さが蘇って来た。それは一つには、家族の住んでいる横浜を離れたため、彼らの苦しい毎日の生活のことを考えてくよくよしないですむからでもあった。彼はもう十六歳になっており、青年期へ一歩踏み入っていた。たとえ苦しいことがなお続くとしても、それに堪え、撥ね返す力が、肉体的にも、精神的にも充実しかけていた。



名作「宮本武蔵」執筆中に、九州小倉にある武蔵の碑を訪れて取材した　(昭和12年)

吉川英治が俳句に親しんだのは、十歳くらいのころからである。義兄の政広(年譜参照)が、彼に俳句を作ってみることをすすめ、文学の手ほどきをした。

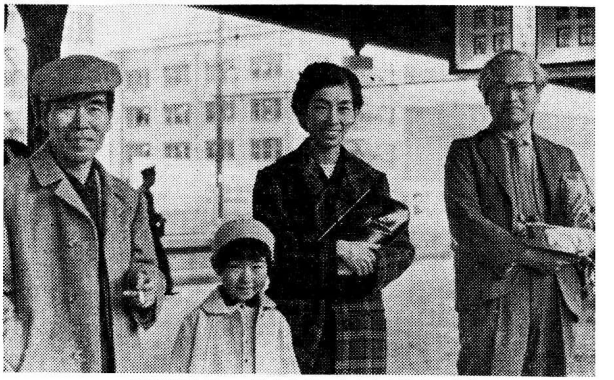
学校の作文の中に自作の俳句を入れて出したら、先生が、他人の詩歌を自分の作ったもののような顔をして出すべきでないと叱ったので、涙をこぼした。

税務監督局の給仕をしているころ、露店で「芭蕉句抄」を買い、以後数年間身辺を離さず耽読した。

続木商店の横須賀支店にいるとき、横須賀新聞に投句したところ、一等になり、選者の俳人と新聞記者がたずねて来た。主人の妻が気を悪くして「うちは商店ですよ」といったので、以後主人夫妻の見ているところでは俳句に無関係の顔をした。

話は前後するが、広告取次店の帳場にすわるようになったとき、『貿易新報』の俳壇へおりおり投句し、新年特別募集では一等になり、四ダース入りのビール箱をもらって、処分に困ったというエピソードもある。

小説というものをはじめて書いたのも、この店の帳場格子の中であった。高島米峰の主宰する『学生文壇』という雑誌の二号に投書したところ、入選した。三、四十枚のもので、題は「浮寝鳥」といった。



「新平家物語」の取材旅行　左から吉川氏、次女香屋子さん、文子夫人、挿絵担当の杉本健吉氏

そのころの横浜は、素人のシェクスピア劇の会、源氏物語の輪読会、句会、短詩の会などいう文学的な集りがあちこちにあり、全体として教養を求める若い人の動きが活潑であった。吉川英治は気の向くままに、それらの会へ顔を出した。

近くの商店の娘や、医院の令嬢にほのかな愛情をおぼえたのも、このころである。青春のよろこびと悲しみが、ようやく彼の胸に渦を巻きはじめた。

英治が続木商店の横須賀支店へ勤めに出てから、家はいよいよ窮迫した。そのころ母の実家の父が東京で危篤におちいったという電報が入った。しかし父は母が駆けつけることを許さず、母は、

「お母さんは親の臨終にも行けない罰当りなんだよ」

と終日泣いていた。

どんなに苦労しても、やっぱり家にいた方がいいと思い、英治はまもなく横須賀から家へ戻った。一家はすでに場末の戸部へ引っ越している。看視長屋といって、戸部監獄の看視が多く住んでいた。

英治は近所の留さんという労働者の手引きで、保土ケ谷(ほどがや)へ土工にかよった。夜は父母にないしょで按摩(あんま)に出た。母は大福やアンコロ餅(もち)の行商に出た。しかし、餅売りは、貸しが多くなり、かえって損がかさむので、まもなくやめた。

保土ケ谷の仕事が終わったとき、彼は横浜船渠(ドック)会社へ入れてもらうことになった。十八歳という本当の年をかくして、二十歳といえといわれた。職場は船具部といって、最下級の雑役をするのが仕事である。百人以上の仲間が六組に分かれ、一組十七、八名ずつから成っていたが、彼はその中で一番年若で、体格も貧弱だった。従って、誰よりも働きがなくて、足手まといになるくらいだったが、いじめる者はなく、かえって皆でかばってくれた。ハマっ子特有の洗練された、明るい気質の男たちだった。

馴れない力仕事はつらかった。毎朝の足が重くて、元気に家を出ることができなかった。しかし、貧乏にやつれた母が、心をこめて弁当を作ってくれるのを見ると、やめたいと思っても、口には出せなかった。

そのうち、彼は船腹のペンキ塗りの仕事の最中に、約四十尺の高さから、ドックの底へ、足場もろとも落とされて、病院へかつぎこまれた。運ばれる途中で、人事不省におちいった。

彼が死にもせず、けがもしなかったのは、ほとんど奇蹟だった。彼は足場板といっしょに落ちたため、地べたへ着いたとき、板の端といっしょに、どんと腰を打って、一度、はずみ上がり、ころがるとき、肩や脚をいためる程度ですんだのであった。

しかし、この十九歳の若者は、こういう危急のときでも、看護婦の白い手に恥じらいを感じて、顔を真赤にしていた。彼は自分の肌のきたなさが気になり、頭髪の根に鉄錆の粉を沈めていないか、どこかに赤ペンキのしみがついていないかと、劣等感のとりこになった。

全快して退院したとき、彼は父にむかって、東京へ出て、苦学したいという日頃の希望を述べた。父は許した。

Ⅲ

明治四十三年の暮の三十日、彼は生まれてはじめて、家という巣箱を出た。彼のために、母は赤飯と干魚の尾頭つきを供してくれた。

今日では、横浜と東京は通勤できる距離になってしまったが、明治のころは、まだ日に何本とかぞえるくらいしか汽車はなく、横浜の人にとって、東京へ出ることは大事業であった。母はわざわざ桜木町駅まで送りに来た。

吉川英治が東京へ着いてはじめて身を寄せたところは、本所相生町のキリスト教職業紹介所であった。その紹介で、彼は本所菊川町の小さな螺旋釘工場へ勤めることになった。

この工場の仕事は、単純な労働であったけれど、終日やっていると、心身ともに疲れ果てて、夜、書物を読む気力も体力も残らぬほどであった。

ある日彼は将来のことを相談するつもりで、学習院の教授をしている英文学者の伯父を訪ねた。伯父といっても、母の姉が嫁した人である。その伯母はなくなって、別の人が後妻になっていた。

伯父は彼の苦学の意志を認めようとせず、無断で家出したもののように解して、熱心に帰宅をすすめた。伯父はそもそも、苦学などというものを認めようとしなかった。そ

自作の句の揮毫「七生人間　あとかたもなきこそよけれみなと川」　絵は杉本健吉氏

の本心は、貧しい姻戚が負担となることを恐れたのであろう。英治は失望して去った。

螺旋釘工場に見切りをつけた彼は、S手提金庫製作所へ移った。ここならば勤務時間のほかに、勉強する余裕があった。その社長が学資を出して工業方面の学校へ出してやろうと申し出たとき、彼はことわるしかないと思った。ただ一人の稼ぎ手である彼のいなくなった家は、窮乏のどん底に落ちているらしい。彼はすこしでも早く金を手に入れて、送金する必要があった。何年も悠々と勉強している余裕はなかった。それに、なまじ他人の恩顧を受けて工業の専門技術家となるよりも、身に持って生まれた文才なり画才なりを自由に伸ばしたいと思ったのかも知れない。

たまたま彼は、塗工部の通勤工の一人から、輸出金属象嵌の下絵描きの徒弟に住み込むことを勧められた。住み込んだ先は浅草三筋町の蒔絵師塚原氏方である。塚原氏は独身で、四畳半に六畳二間きりという長屋の一軒に住んでいた。師弟二人きりの男世帯で、台所の水仕事から、ミソ醤油、八百屋、魚屋の買出しまで、英治の役割であった。

金属象嵌というのは、金属の表面へ漆で描いたさまざまの図案を、化学薬品に浸して腐蝕させ、その凹刻面に鉄さび漆を沈ませて研ぎ出した上、各色のメッキをかけて、さらに精巧な毛彫をかけたものであるが、英治の仕事はその下絵を描くことであった。ハンコ屋の徒弟のころ、内儀の顔を写生して追われるほどの腕を持ち、父の店の帳場でも、たえず画家になることを夢見ていた彼は、たとえ職人仕事であるにしても、好きな画を描くことで収入を得たわけであるから、土工や行商にくらべて、多少とも仕事に楽しみをおぼえることができたのであった。

吉川英治は作家として一家を成してのちも、暇々には書や画を描くことを好み、その描いたものは専門の画家にくらべて見劣りのしないほどの出来ばえを示したが、その素地はこの塚原氏のもとでの修業によって作られたのであった。

三筋町界隈は旧江戸の庶民の生活の面影が濃厚に残っているところであった。近所に住む人たちは、瀧亭鯉丈や十返舎一九の登場人物になりそうな人たちであった。吉川英

芥川・直木賞受賞パーティで、大佛次郎氏と語る　（昭和36年2月）

治はここに住むことによって、江戸文学の空気をじかに肌に感じ取ることができた。それらが後年の彼の作品の大きな特長のひとつとなっていることは、いうまでもない。

明治は大正と改まり、英治も満で二十歳になった。もう一人前に成人したわけである。

仕事のかたわら、彼は句会などに出席し、井上剣花坊、伊上凡骨、川上三太郎などの川柳作家と知り合い、『新川柳』の同人に加えられた。彼の号は雉子郎である。彼はしだいにその才能を認められつつあった。

塚原氏のもとに二年いたのち、英治は独立した。はじめて下谷西町の髪結いの二階に三畳の一間を借りて、自分の根城とすることができた。

文化勲章受章記念　左から、吉川、田中耕太郎、佐藤春夫、岡潔の各氏　（昭和35年）

そのすこし前に、横浜から一家が上京して、母の袋貼りや仕立て物の手内職で生計を立てていた。父は病に倒れて、もはや再起の気力も意志もなくなっていた。母はその良人をかかえて、生活のために戦っていた。しかし、吉川一家にとって、最悪の時期は過ぎ去りつつあった。母の努力によって、茶ダンスや火鉢、茶卓などの家財道具が、すこしずつふえていったのである。

塚原氏から独立してみると、今まで知らなかった金が入った。貧しかったこれまでにくらべると、夢のようである。それがみな、自分の思う通りに使える金である。青春の血のそそのかすままに、彼は女遊びをはじめた。そのころの通念では、吉原は罪悪の町というより、風流の町であった。十二階下へもいった。川柳の仲間では、遊蕩は高尚な紳士の趣味であった。これまでの暗くさびしい青年時代と打ってかわった、華やかな青壮年期が、彼の前にひらけた。

下谷西町の二階の三畳に吉川英治を訪ねる者が多くなった。その中には、井上剣花坊、川上三太郎ら、新興柳壇の第一人者の顔も見られた。それは、まだ弱冠二十歳の吉川雉子郎が、いかに彼らの間で重んぜられているかを物語るものである。彼の才能がようやく人に認められる時が来たのであった。

彼は剣花坊の来訪を待つだけでなく、こちらからも出かけた。剣花坊は日本新聞の記者で、史学家でもあり、政界の事情にも通じていた。雑談のうちに、吉川英治はいろい

ろのことを学んだ。また剣花坊を通じて知り合った人も、数えきれぬほどである。松林桂月、松居松葉、笹川臨風、小山内薫、水野葉舟、木下杢太郎、与謝野寛、倉田百三等等……吉川英治の行動半径と視野は急速にひろまってゆく。

大正三年、彼は二十二歳になった。生計の道に自信を得た彼は、浅草栄久町にはじめて一軒の家を借り、ながらく離れ住んだ父母弟妹を呼び寄せて、ともに住むこととなった。四間の小家ながら、庭もあり、世間なみの暮しができるようになったのである。

この年、『講談倶楽部』の懸賞に応募した小説「江の島物語」が当選して、彼は作家としての自信を得た。しかし、まだそれだけでやってゆけるわけではない。主な収入はやはり、輸出むけの象嵌絵である。彼はよく自作の工芸品をもって、横浜の商会へ売りに行った。

大正五年には日本橋区浜町に移り、八年には向島寺島へ移った。しかし、このころ世界大戦の影響で、輸出美術品の売れ行きが悪化した。

九年、英治は満洲に遊び、大連のホテルにこもって、小説を書き続けた。末弟晋氏はこの間の事情について、つぎのように書いている。

《母危篤の報をうけたのは、満洲の大連であった。

当時講談社が大々的に催した懸賞小説に応募する原稿を満洲に遊んでいる間に書いた。それが時代小説「縄帯平八」ユーモア小説「馬に狐を乗せ物語」童話「でこぼこ花瓶」で、それぞれに当選して、当時としては莫大な賞金（注、七百余円）を手にすることになり、母の葬儀もとどこおりなく済ましたという話は衆知のごとくである。

兄の満洲ゆきは、青年血気の情熱の吐け口をもとめたとともに、数年前「江の島物語」が講談倶楽部の懸賞小説に一等当選したことから、文筆で起つ自信もあったのであろうか、原稿執筆にすべてを賭けた感がある。とすれば、このころから、吉川英治という作家は発芽していたのだと考えていいと思う。

この先を考えている豆の蔓

という当時の柳壇で名句といわれた川柳を詠んだのもこのころであった》（講談社版吉川英治全集月報(1)所載「肩

軽井沢の別荘で、文子夫人と（昭和34年8月）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.